

私の幼児教育論

——鏡のたわむれの中で、ひとは無限に表面にいる——⁽¹⁾

亀井観一郎

四月の朝、水晶の輪舞する空の下、園庭で4才児の子達と遊んでいるとお化け屋敷に誘われる。5才児の保育室の前まで行くと戸口から、透明な陽光の降り注ぐなか、カアテンをしめて、保育者と子ども達がゆらゆらとお化けになって漂うのが見える。朝の光と仄暗い箱の中で漂う赤、黄、青の服をまとった華やかな霊。私はそのイメージに一瞬うたれる。子供達の軽やかな妖気……

そのお化け屋敷も続くことなく、フッと一日で終わった。いまはヘメラルド。五月の露。4才児のクラスで魚つりをしている。画用紙に描かれた魚を積木で囲い、一人二人と糸をたれている。魚になって泳ぎまわる子もいる。

〈不思議のあまりおのが耳をかえり見れば、いつのまに鱗金光を備へてひとつの鯉魚と化しぬ。

あやしとも思はで、尾を振り鱗ひらを動かして、心のま

まに逍遙す。まづ長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大湾の汀に遊べば、かち人の裳のすぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる、深き水底に潜くとすれば、かくれ堅田の魚火によるぞうつつなき。——夢応の鯉魚・上田秋成⁽²⁾

★

ここ数ヶ月、意味の燦めきについて考えている。子ども達の遊びにおけるイメージの背後に流れる時間の軌跡の衝突。思想の天才達はその背後に無限に浸透し、重層的に意味の迷宮を構築しつつ、解釈の彷徨をはじめ。日常の世界は鏡の前で何ら関係なく進行する。そして多分、子ども達は、存在それ自体でアリスのように鏡の向こうとこちら側を自由に往還する。

大人たちは子供が鏡の向うに隠れると、目の前にいても見えずに怒る。大人もまた子ども達が向う側へ行ってしまうたことを本能的に悟るからだろうか。しかし、誰

しも日常性の繰り返しに疲労した大人とて、鏡の向うにある瞬間、或いは毎夜夢の中で往還しているのではないか。幼児性が世界の根源性、本質に触れることであるとしたら、思想や芸術は幼児性を意図的に志向してきたのではないか。それ故、大人の社会は彼等にその毒をふたする為に、芸術家という椅子を与えたのだ。

子ども達がよく迷路をつくって遊ぶように彼等は自ら望んだ、言葉・イメージの迷路、〈象徴の森〉にふみ入るのである。たとえばボードレールはそれを知っていた。彼の夥しい母への書簡、日記——〈赤裸の心〉〈日箭〉は言葉そのものの意味でボードレールが幼児性——芸術家の二重の世界の緊張に耐え得たこと証している。

〈鏡を前にして生き、かつ眠らねばならぬ〉
〈毎晩のぶきみな冒険である睡眠について次のように言うことができる。すなわち、人々は毎日大胆さをもつて眠りにつくが、この大胆さは、それが危険に対する無知の結果だということを知らなければどうにも理解し得ないものである。〉⁽³⁾

昼と夜、知と非知、迷宮と舗装道路。私には幼児教育とは不思議な国のアリス・リッデルのように子供と手をたずさえて、鏡のこちら側と向こうを、世界の持つ無数の側面の輝きをわがものとするため、即ち仮面をつけないがら（魚族、怪獣、霊、病人、医者、父母、石、海、犬や猫、草木、昆虫に変身して）往還する行為であるように見える。それは性の差異、時空を超えた魔術的世界劇場であり、ルイス・キャロルと鉄人二十八号が、UFOに乗ったニーチェと上田秋成が、若く美しい幼稚園の先生と怪人二十面相が、水木しげるとアンドレ・ブルトンがマントをはおった織田信長とダンテが手を取りあって、ドイツ浪漫主義風オペレッタに登場する……。観客席の子ども達は驚かずに、笑いこぼげしばらくすると、サッとファントマのように消えてしまふのだろう。

★

子ども達が二階のテラスに椅子をならべ、雲を眺めな

がら、映画館ごっこをはじめた。雲の映画館という事例を或る先生から聞いた。空雲、木などを誰しも時間を凝縮させて視たことがあるに違いない。（何年か前、4才の子とペープ・サートをしていたら、画用紙を青くぬり、「海」という役が登場してきて驚いた。）私の園の屋上は見晴しがよく、夕方丘の向うに赤橙色の陽が沈み、低い丘の木々が暗灰色にしげる。朝は、光を受けて木々が一斉に歌う。

雲の映画館で、空を眺めていた子ども達も自然のもらす感性の雨にうたれたに違いない。このようにして、一本の木、一片の雲と交感し、存在が向う側から一人の人間に訪れるのを待つこと。自分が木となるまで見続けること。或いは対話をかわすこと。葉群のヴォリューム、マッス、枝の力学の精緻なバランス。フォルム。知覚世界を探求することは、終りなき冒険である。煙草の灰、消しゴム、コップ、全ては美しい。子どもが、じっと立ちどまって見ている時、どのような知覚体験をしているのであろうか。何故、教育の世界では、ねらい、到達度

等と硬直した大人の頭をますます硬化させる努力をするのだろうか。何故、感受性の研究をしないのだろう。現象界を構築する存在の大きさ、そのはかなさ、色彩、質量に直接触れるのは、感性である。それを通して我々は自己の真の時間、即ち存在との認識の歴史である論理構造——思想に近づくことが出来るのではないか。

保育の過程も同様であると思う。



子どもは大人よりも性について自由であるようだ。彼等の両性具有的な魅力、その両性を超えて浮遊するよう不思議さ。ドイツの美術史家のグスタフ・ルネ・ホッケは「迷宮としての世界」——マニエリスム美術——のなかで次のように述べる。「未開人の魔術的世界観念にあつてはいうまでもなく、また歴史的諸民族の魔術的世界観念のなかでも〈両性具有者〉であるヘルマフロディトウスは一つの宇宙的原像になつている。ヘルマ

フロディトウスはすぐれて *par excellence* 芸術的な性である。(中略)レオナルドの「ジョコンダ」(モナリザのこと筆者註)がこの点で世界的な寓意像と呼ばれる。彼女のなかへもしくは彼のなかへには、〈男性のもつ頭腦的な權威〉と〈魅惑的な婦人〉のもつ官能性とが一体化しているのだ。「聖ヨハネ像」(レオナルドの作品)では性は一つの〈謎〉となつている。つまりレオナルドは〈アニミズム的な〉明暗法を発見したのである。⁽⁴⁾



子ども達の軽やかな、疾走する両性具有的宇宙！ そういえば幼稚園の園長先生にも、あの「ジョコンダ」の如き謎めくえまいを浮べている人達がいる。可愛い男の子に女装させる大人達もいる。一見すると男の子のような女の子もいるではないか。これらは全て存在の大なる神秘であり、パンドラの箱から飛び出したユウモラスな小悪魔達だ。その悪魔の末裔であるオスカア・ワイル

ドは呟く。

へ人間を善いのと悪いのに分けるなんて、馬鹿げています。人間は魅力があるか退屈かですよ。——ウィンド

ミア 卿夫人の扇⁽⁵⁾——

オスカア・ワイルドは、百合の花を道に敷き、ロンドンにサラ・ヴェルナルを迎えた。そういえば、おしべとめしべのある花達も両性具有であった。

★

数年前の夏の朝、I少年と小さな丘の上で虫をとっていると、突然、かなぶんが羽をならして飛び去った。その迫力にあ然としてみると、すぐにヘリコプターが飛んできた。その瞬間、私はかなぶんとヘリコプターは親戚であると確信した。それに気付いた時、私は嬉々としてIに伝えると彼も納得し笑いこぼれた。

最近I少年と3才の弟Tは、対になった言葉の戯れを繰り返して喜ぶ。

I 「ラリコ」

T 「アッピキ」

I 「ジンジンジンパン」

T 「ゴリラッゴッゴオウ」

ラリ湖はIが考えた幻想の湖であり、二人の間では、意味をかるうじてまわりつかせた一種のかけ声めいたものである。

言葉遊びは恐しいと思う。音声を媒介に突然、異次元へ飛ぶことができるからだ。4・5才の子が言葉自体を物として戯れているのを見ると、シュール・レアリストの自動記述を思ったりする。時として意味なき言葉を喜ぶ子どももの不気味さよ。

へ一八七四年七月のある午後、折から散歩の途中にあったアリスの生みの親の脳裡に、ふとつぎのような一行の誌句が浮かんだ、という——「さよう、スナークはたしかにブージャムだったのだ」。皆目意味の判らぬまま、彼はそれをただちにメモに書きとめ、数日後、それを最終行とするアナペスト格の四行詩をこしらえ、そしてそ

の二年後のひまひま、いかにも大団円めいたその尤もらしい部分に到りつく各段をしだいに書きつないでいて、ついにそれを最終節とするル章第百四十一節に及ぶ詩編を完成させた。『スナーク』狩りへの試み・沢崎順之助⁽⁶⁾。恐るべき永遠少年よ。

言葉・言霊。この種の文章を書こうとすると鏡である原稿用紙の前で私は文体を探す。文体こそは言葉という宇宙の誕生の仕方、言葉という思想そのものだからだ。それは、子供が遊ぶとき自分のイメージや身体に最も合った遊びかたを必然的につくりだすのに似ている。心と身体とのイメージの行動の文体。子供が自由に遊べないのは自分の文体が見つからないからであろうか。もしかすると、幼児教育の仕事は大人と子供が互いに相手の宇宙の文体を引用し、つつ巨大な星雲を創造することであるかもしれないぬ。

(寺尾第二幼稚園)

注

(1) 宮川淳『紙片と眼差とのあいだに』小沢書店
一九七四

(2) 上田秋成・鶴月洋訳註『雨月物語』角川書店
昭和三十四年

(3) 矢内原伊作訳『ボードレール全集』人文書院
一九六三

(4) グスタフ・ルネ・ホッケ著・種村季弘・矢川澄
子訳『迷宮としての世界——マニエリスム美術』美術出版
社 一九六六

(5) スーザン・ソントグ著・高橋康也・出淵博・由
良君美・海老根宏・河村錠一郎・喜志哲雄訳『反解釈』
竹内書店 一九七一

(6) 沢崎順之助『「スナーク」狩りへの試み』別冊
現代詩手帖第二号・ルイス・キャロル思潮社 一九七二